

## 審査結果の要旨

論文題目「ジョナサン・スウィフト、悪疾と諷刺」

学位申請者 小島 弘一

本論文は、「はじめに」と「結び」を含めて7部からなっており、英国の作家ジョナサン・スウィフトの梅毒罹患の可能性を検証し、この悪疾が作家の人格や作品に及ぼした影響を考察することにより、彼が諷刺作品の執筆へと向かった原因が梅毒罹患にあることを明らかにしようとするものである。

「はじめに」では、スウィフトの伝記的背景と、病気罹患および諷刺についての概観を述べ、著者の研究の方向性を明らかにしている。第1部では、スウィフトの著作の傾向を大きく変えた梅毒罹患をとりあげて、その可能性について当時の伝記的・医学的文献等から検証し、スウィフトの病気を梅毒性内耳炎としている。第2部では、梅毒罹患によって、結婚の能力と可能性を失い、結婚不適格者となったスウィフトが、身近な女性たちにどのように接し、どのような女性観を持つに至ったかを書簡を分析する等して詳細に論じている。第3部では、イングランドにおいて道徳的社会の構築がなされていないことが、梅毒治癒の障害になっているとして、スウィフトが『ドレイピア書簡』や『謙虚な提案』を通して、道徳的社会の構築を訴えるという社会改革者としてのスウィフト像を考察している。第4部では、スウィフトが、自らの梅毒罹患の事実を隠すためにペルソナを用いて、『桶物語』と『ガリヴァー旅行記』を執筆し、また、道徳的社会の実現のために、社会の欠陥を諷刺を用いて描いていることを指摘している。人間嫌いになったことも、諷刺の技法を用いるようになったことも、梅毒罹患に原因があるとする。第5部では、叙景詩人として出発した彼の詩風が、諷刺詩に変化した原因が、彼の梅毒罹患にあることを論じている。「結び」では、これまで論じてきた結果をまとめ、スウィフトの執筆動機が、梅毒をなくすための道徳的社会の実現にあったという結論を、改めて提示している。

本論文に対する審査は委員会を2013年6月11日(火)(17時から18時30分)、同10月15日(火)(16時から18時)、2014年1月10日(金)(15時から16時)の3度開催し、学力試験(英文の日本語訳、日本語の英訳及び論文の主旨を英語で記述)を2013年6月10日(月)に実施し、更に公聴会を同6月25日(火)(15時10分から14-415教室)に実施するという形で行った。

これら一連の委員会での検討、更に公聴会での質疑応答を通して、本論文は以下の三点で評価すべきとされた。第一に長年謎とされてきたスウィフトの病名について医学的文献などを基にして梅毒であると提案していることである。この提案に基づいて作品を独創的に再考察して論文を整合性と独創性のあるものにしていく。第二点としてはスウィフトを作家としてだけでなく詩人としてまた社会改革者としても考察して多方面からスウィフト像を

浮かび上がらせていることである。特に詩を取り上げることによってスウィフトが人間観察力や人物描写がすぐれていることを示している。さらに現実が希望とは異なることを認識したスウィフトの内面をうかがい知ることができる。第三にいたるところに示唆的考察があり、今後の発展の可能性が大きいということである。

今後の課題としては病名そのものに関心が向いてすべての作品をそれと結びつけようとしている点である。病名が不明な時点での先行研究の問題点を明確にした上で作品を再考察して、病名を提案するならばより説得力のある論文になるはずである。

このような課題はあるものの、長年謎とされてきたスウィフトの病名が梅毒であることを医学的文献に基づいて提案したことは評価すべき点であり、今後スウィフトの研究がさらに発展することを示唆するものである。

以上の結果、本論文は学位論文として十分な内容を有するものと審査委員全員の一致で判定された。したがって、申請者 小島 弘一は東海大学博士（文学）の学位を授与されるに値すると判断した。

#### 論文審査委員

主査	文学修士	猪又	千鶴子	文学部特任教授（文学研究科英文学専攻）
委員	文学修士	奥田	良二	外国語教育センター教授（文学研究科英文学専攻）
委員	文学修士	斎藤	早苗	文学部教授（文学研究科英文学専攻）
委員	文学修士	檜崎	健	文学部教授（文学研究科英文学専攻）
委員	博士（文学）	河崎	征俊	駒澤大学文学部教授